

R5 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	小林 聡	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献のすべての分野に渡り、努力をした。及第点には達していると思う。研究活動にもう少し時間をかけられるよう、スケジュール調整にも気を配って行きたい。
作曲	教授	山本 裕之	作品発表の数が若干低迷した年度ではあったが、その分クオリティを落とさずに気をつけた。また未発表ではあるが初めての映像作品を完成させたことを機に、作品制作の幅を広げていきたい。ここ数年調査してきた戸島美喜夫の作品については漸くリストとしてまとめることができた。 近年とみに仕事量が増え、私のみならず周りの教職員の疲弊度合いが目立って感じられる。インセンティブや人的リソースが増えなければ何事も好転しないのは明らかな中で、これ以上研究教育クオリティを下げないためにはどうすれば良いか、全学的な問題であると感じる。
作曲	教授	成本 理香	今年度も、様々な大学運営業務が日々降りかかってくる中で、計画以上の数の作曲、企画、研究等を行うことができ、充実した年となったと考える。特に、日東財団からの助成を得て行った「クロスジャンル」をテーマとした研究は、新たな研究対象の発見にもつながり、また、ここまでの研究成果発表としての個展（コンサート）を開催できたのは大きな出来事である。さらに、今年度は、自分のクラスからのコンクール入賞、公募入選者が数多く出たことは大きな喜びであった。特に日本音楽コンクール1位と奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門1位（最年少1位）という、誰もが知る大きなコンクールで学生が1位入賞したことは、他の学生たちにも励みになり、他の学生たちが様々なコンクールや公募にチャレンジして、次々入選の結果を出してくれた。学生同士が刺激を与え合う良い空気を作り出しているのが良かったと思う。 毎年書いていることと重なるが、大学運営では職員も教員も多忙を極める状態が続いているので、もう少し仕事を整理する必要があるだろう。特に一部の部署、一部の職員、一部の教員にのみ過剰に仕事がかかる現在の状況は決して健全ではなく大学または法人全体で考えるべき重要事項であると考えている。
作曲	准教授	安野 太郎	『大霊廟IV-音楽崩壊-』の実現に多くの時間を割いた。インターカレッジ・ソニックアーツ・フェスティバルの運営によって全国の電子音楽を教える大学関係者や学生が訪れたことへの教育効果がどのようにあらわれてくるかが楽しみだ。来年はぜひこの活動を充実させたい。
音楽学	教授	東谷 護	学術研究においては、歌謡曲文化に関わった作詞家に関して5年ほど前に提示された説の間違ひについて新資料を提示して正した。この研究成果によって、今後の学術研究が発展することが予測できる点において、研究活動については高く評価できよう。教育面においては、博士論文1本の副査と、副指導に携わったことをはじめとして、学生の書いた論文へ懇切丁寧な指導を行ったと自負している。大学運営面においては、博士後期課程委員長として、博士後期課程の充実に向けて、様々な問題点を洗い出し、今後の運営の課題を見出すなど、かなりの時間を割いたという点において、評価したい。しかしながら、これらに多くの時間が割かれたため、社会貢献にまで手が回せなかった点は来年度以降の課題として残った。総じて、教育、研究、業務それぞれに力を尽くしたと言える。
音楽学	講師	七條めぐみ	研究活動においては、国内での調査だけでなく、数年ぶりに国外での調査を実施し、収集した資料に基づく口頭発表を行った。この内容を、令和6年度に論文として発表する予定である。教育活動では、卒論5本、修了論文10本の指導に携わるだけでなく、基礎教育科目「西洋音楽史概説」では、令和4年度から行っている20世紀音楽の充実をさらに推し進めた。社会貢献としては、「病院アウトリーチプロジェクト」にて藤田医科大学病院での対面によるアウトリーチ公演が4年ぶりに実現した。コロナ禍での制約がほぼなくなったことを、研究や社会活動において生かせる一年であったと感じる。
声楽	教授	中巻 寛子	コロナ禍以来、大学運営に様々な困難が募る中で、現状と将来を見据えながら精一杯職務に取り組んだ。 研究面では、従来から取り組んでいる「イタリア古典歌曲」研究において、共著用原稿1本を執筆（R5.2.14現在未刊行）したほか、新たな作品研究に着手。継続と進展を期するところである。

R5 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	森川 栄子	教育面においては今年度も大きな成果を挙げる事ができた。研究面においては海外研修を再開することができたのが今後につながる成果であると考えている。
声楽	教授	小原 啓楼	指揮者の高関健氏、飯森範親氏、水戸博之氏などと、日本センチュリー交響楽団、パシフィックフィル、東京シティフィルなどのオーケストラとの共演を通じて日本、ドイツ、イタリア作品と、広範に大きな研究成果を得られた事は高く評したい。また、二期会オペラ研究所、東音付属高校等、其々の現状に合ったニーズに応えつつ貢献ができたと評価する。本学における教育においてもティーチングではなくコーチングを目指し、学ぶ側の自主性を引き出す効果が実績を上げつつあり、更に、各々の進捗・状況にあった示唆を目指したいと思う。
声楽	准教授	川島 幸子	今年度初めて声楽専攻主任を務め、声楽部会の時間短縮化、Teamsを使って仕事の効率化を図り、概ね成果が出たと思う。 教育面では、学部4年生3名が、前期実技試験及び卒業演奏試験において1位および上位に入り、定期演奏会に2名（1位と3位）、卒業演奏会3名全員（1位・3位・5位）に出演したことは大きな指導の成果だった。 同じく学部4年生1名が毎日学生コンクール・名古屋大会で入選など、4年間の指導が着実に実っていることが実証された。 自分の演奏活動もコロナ以前の状況に戻りつつあり、充実してきた。
声楽	准教授	初鹿野 剛	学生の授業履修、研究活動などのサポート等、声楽専攻内の所掌業務を遅滞なく行うよう努めた一方、それらの比率がこれまでより増大し、自身の研究活動に割く時間を少なくせざるを得なかったことが悔やまれる。来年度以降、所掌業務をこれまで以上にテキパキと進め、少しでも研究活動を増やすべく努力をしていきたい。
声楽	准教授	森 寿美	今年度、各項目で目標として掲げた内容を達成することができた。教育活動では初めて4年間担当した学生が成果を上げて来たことが大きな収穫である。来年度は、さらに演奏研究活動を深め充実させていきたい。
ピアノ	教授	北住 淳	本学での教員生活も次年度で定年退官となるが、気づいて見るとかなり「活動方針」とも言うべき音楽活動の方向性に則った自らの活動であるように思われる。大学によって自らの活動が活かされ、その活動が本学の芸術教育の場を活かすことに些かなりとも貢献できることが、本学教員としての自らの存在理由であることを、次年度もまた忘れずに活動したい。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	施設整備委員会副委員長としての業務、および教育活動と並行して研究活動を継続し、セルゲイ・ラフマニノフ生誕150周年記念ピアノ独奏作品宛曲演奏会Vol.2、3（全4回）を行った。研究活動の時間の捻出に苦労しながらも継続できたことが演奏会開催を可能にした。
ピアノ	教授	内本 久美	教育活動と演奏活動を共に積極的な研究活動を継続的に行った。
ピアノ	教授	鈴木 謙一郎	コロナ禍での研究、授業の制限も大分無くなり、全てにおいて順調に進めた。
ピアノ	准教授	中尾 純	名古屋ではコロナ中止以来のピアノ・リサイタルを行った。西洋音楽のすばらしさを、引き続き演奏と教育をもって伝えて行きたい。
ピアノ	准教授	武内 俊之	本学を取り巻く環境と状況は大きく変化しつつあり、そこへ対する問題意識を新たにさせられた年であった。しかし、日常の教育、運営業務だけでもかなりの負担があり、意欲があっても現実にはなかなか十分な取り組みもできない状況である。これは個人の努力だけではクリアできない課題であると感じている。

R5 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
ピアノ	講師	秋場 敬浩	<p>本学専任教員としてお迎え頂いた最初の年度ということで、環境に適応し、諸業務をめぐる様々な課題を解決することに戸惑う瞬間もありましたが、ピアノコースの同僚の先生方、他コースの先生方の温かいご指導とご助力を頂きながら研究活動と教育活動に専念することができ、また、大学運営に対して積極的な姿勢をもって参加することができました。</p> <p>一方で、社会貢献に関しては、元来の主要な活動拠点であった東京に集中するものであったことから、今後は本学にとっての地元である愛知県に対する貢献も果たしてゆけるよう、活動領域を拡大してゆきたいと思います。</p>
弦楽器	教授	福本 泰之	<p>コンサート等はほぼコロナ前に戻ったと感じる。逆に次年度には助成金削減のためにオペラ公演が取りやめになるなど、音楽芸術には厳しい時代になったと実感する。社会連携センター長として自分なりに積極的に努めてきたつもりではあるが、もっと活躍しなければならなかったと反省する部分も多い。</p>
弦楽器	教授	花崎 薫	<p>愛知芸大定年前の一年、特に研究活動に於いてたくさんの成果を上げることができたことは充実の一年間であったと思われる。また門下生のコンクールでの入賞、オーケストラへの就職など学生の活躍が著しかった。</p> <p>ケルン音大のシュヴァイカー教授を2017年に引き続き招聘できたことは提携大学との交流をさらに深めることになった。</p>
弦楽器	教授	白石 禮子	<p>今期は計画通りに研究活動を行うことが出来、いずれも大変好評であった。</p> <p>教育活動は、コロナ感染予防として換気等に引き続き注意をはらいながらのレッスンとなった為、学生達にとっては室温コントロール等の面で多少負担があったかもしれないが、皆、自身の練習やレッスンには非常に真剣に臨み、宗次ホール主催のコンサート出演やコンクール入賞・入選、「室内楽の夕べ」出演等、学内外で多くの成果を挙げた。社会貢献では、学外で開催されたオーディションやコンクールの審査を計画通り行った。</p>
弦楽器	教授	桐山 建志	<p>特に研究活動で、演奏会の数がコロナ前以上に多かったと思うが、どの演奏会でも充実した演奏ができ、大きな成果をあげることができたと思う。</p>
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	<p>今年度は地形劇場のプロジェクトなど、新しいことにも積極的に取り組むことができ、大変充実していた。SNSなどが隆盛の今、大学が発信することの大事さを感じた一年でもあった。こうした面では、もう一歩取り組みへの積極性が必要に思う。授業では、弦楽器の学生一人一人がとても積極的に自分の意志を持って取り組んでくれるのがとても頼もしい。素晴らしい学生のみなさんと大学の枠を超えて、地域と連携して音楽を地域に発信できるような取り組みを増やせていけたらと考えています。</p>
管打楽器	教授	倉田 寛	<p>令和5年度はソロ・室内楽・オーケストラの研究活動に力を注ぐことができ、「音色・響・表現」など実践を交え研究することができた。特に教員陣による金管5重奏のリサイタルでは作品を通し、また宗次ホールという素晴らしい音響空間の中で、さまざまな「響」について研究することができた。</p> <p>教育・社会地域貢献においては、本学と日進市とで行われた企画「音楽のまち 日進しえん コンサート」において、日進市の子供達と本学学生及び教員との交流があり、8/7 楽器体験・ジョイントコンサートを日進市民会館で実施できたことは、次世代の芸術家を育てるには、こうした専門性の高い教育現場や、生の「音」を知って貰えたことは大変大きく、今後の育成に必ず繋がると確信した。また学生のキャリア支援としても大きな役割があると感じた。芸術文化を育む担い手として、この教育は近い未来大きく育まれ、地域財産として必ず返ってくると信じている。</p>
管打楽器	教授	深町 浩司	<p>国際音楽祭のオーケストラ（SKO）への参加、メソッドを活用した実技指導、音響学会における招待講演、「共鳴～Kyo-meï」プロジェクトによる社会貢献、これらの活動の源となったのはパーカッション奏法の基礎研究である。基礎研究の積み上げが発展しさまざまな分野で成果を生み出すことができたと自負している。</p>
管打楽器	准教授	橋本 岳人	<p>研究活動では、多数のオーケストラで首席客演を務めた他、室内楽、ソロ活動とバランス良く行う事が出来た。教育活動では試演会を多く開催したことで学生達が切磋琢磨し、実技試験やコンクール等に良い効果を与えた他、昨年度は多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務め日本音楽界に貢献した。</p>

R5 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	今年度の実技中心の教育法は、学生がオーディションやコンクールで成功したことを考えると、効果的だったと思います。
管打楽器	准教授	井上 圭	若年層が管楽器を学ぶ機会の減少、環境の悪化は顕著であり、交流を持つことは容易ではなかった。コロナの状況が良かった時期に幼稚園でアウトリーチを行えた点は評価できる。その他は概ね達成できた。
教養	教授	水野 留規	研究面では長年取り組んできた叙事詩の翻訳が最終段階に入り、来年度はその成果を教育活動や社会貢献活動に生かすようにしたい。イタリア語教育に関しては海外で通用する資格試験の受験指導を実施し、6人の受験者全員をA2レベルで合格させることができた。西洋の文芸と歴史に関する講義は昨年までとほぼ同様の内容を扱ったが、年度を重ねるにつれて話術が向上し、内容も深まっている。教養教育の統括や委員会活動、社会貢献活動も予定通りに実施することができたので全体的には満足のおよそ一年間であった。
教養	教授	三宮 敦生	研究面では、ベイズ統計についての理解を深めることができ、学習や記憶との関連で新たな気づきを得ることができ有意義であった。教育面では、授業評価アンケートの「授業全般について総合的に評価するとよい授業だと思いますか」という問いに対して、「強くそう思う」と答えた者が、心理学Aで69%、心理学Bで72%であった。まずまずの結果だと思われる。大学運営面では、人事委員として教養教育の後任人事2件に関与し、公募要項を完成させた。社会貢献では、コロナ禍で3年連続で中止されていた、『親子孫で〈楽しい反説実験〉講座』を夏休みに本学で開催することができた。学外から48名の参加者を得て、成功裏に終えることができた。
教養	教授	井上 彩	全般的にやっとコロナ禍の影響から脱することができた年であった。研究：コロナ禍で進捗が遅れていた科研費の助成事業である研究課題の分析を進め、国際学会で発表することができた。教育：人数制限や欠席配慮などの対策も撤廃でき授業内容をコロナ禍前の状況に戻すことができた。大学運営：自己点検やカリキュラムの見直しを行った。
教養	准教授	大塚 直	令和5年度は入試委員長や紀要委員長を務め、事前の事務方との打ち合わせ、及び様々な会議での委員会報告などを行った。そうした仕事に加え、夏に身内に不幸があったため、予定していた科研費による海外渡航が今年度はできなかった。しかし継続してホルヴァート研究に取り組み、翻訳や論文執筆を進めていった。
教養	准教授	三品 陽平	研究活動、大学運営、社会貢献について、おおむね満足な成果を出すことができた。特に、研究活動については、山崎ら編著『「省察」を問い直す』の発刊を実現することができた。教育活動についても例年通り実施できたが、今後、さらに充実させ、学生の教員採用試験を支えるような活動を増やしていきたい。